

＜今日の説教のポイント テモテへの手紙 I 1章 16～20節＞

1 (16-17) パウロの深い信仰理解から来る喜びを味わいたい。

キリスト教の救いの全内容がここから読み取れるような2節です。「憐れみ」という表現ですが、これはすでに13節で使われ、どうしようもない罪人である自分を見捨てずに救って下さる神様であることを深く知ったパウロの感謝の思いが込められた表現でした(12～15節)。

「キリスト・イエスがまずそのわたしに限りない忍耐をお示しになり」の「まず」が大事です。こちらが罪に気づいて改心したからではなく、罪人のままの私に神様がまずそれを忍耐して下さり、なのです。パウロはそれに驚き、その神に回心した(改心ではなく、神様の方を向いて生きる生き方に方向転換した)のです。その後、それは「わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした」と語っています。パウロ自身が「この方を信じたら永遠の命を得られる」と思うようになっているから、これを他の人にも勧めたい、その手本になりたいと思っていることから出た言葉なのです。だから感極まってその神様への讚美の声を上げずにはおれなくなったのです(17)。

2 (18-19) 深い信仰理解は私たちに落ち着いた生活に導いてくれる。

「あなたについて以前預言されたことに従って」とは何のことでしょう？これはテモテが按手札を受けた時のことが関係しており(4章14節)、何か不可思議な霊的なことが起こったのかと想像するようなことではありません。もっと冷静なこと、すなわち、神様の憐れみに満ちた救い(それが預言の一番大事な内容)を伝えるために神様が建てて下さった教会によってテモテに与えられ、託された使命のことが考えられているのです。ですからこそ、「その預言にカづけられ、雄々しく戦いなさい」と言われた後、「信仰と正しい良心とを持って」と、信仰と並んで一見信仰的というより常識的・道徳的に思われる表現「正しい良心」ということが言われ、この手紙の中で何度も用いられているのです(1:5, 3:9)。なぜか？エフェソの教会に現れて来た誤った信仰を伝える人々が、霊的なことを唱えても、倫理的、道徳的に問題ある言動を起こしていたからです。信仰者は主なる神に信頼するが故に、どのような状況の中に置かれても、この世で落ち着いた生活をし続けていくことができるのです(Iテモテ2:2、Iテサロニケ4:11)。